2018年度

北九州市立大学FD活動報告書

FD活動の報告と授業設計のアイデア

◇ アクティブラーニングで学生の学ぶ力を引き出す工夫とは？

- どうすれば諸問題を多角的・論理的に思考して英語で意見を表現できるようになるか？
- どうすれば「自分で考えるくせ」をつけられるようになるか？
- どうすれば現場体験から学びを得られるようになるか？
- どうすれば文献の引用方法を身につけられるようになるか？
- どうすれば個人の能動的な努力の必要性を自覚するようになるか？

☞ 本書を読めばそのヒントが見つかります！

北九州市立大学FD委員会

2018年度FD活動報告書

目次

1. はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2. FD研修報告
(1) 春季新任教員研修 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
(2) 夏季新任教員研修 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
(3) Moodle活用実践事例とアクティブラーニング ・・・・・・・・・・・・・ 22
(4) 学外 FDセミナー等参加報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

3. 授業のピアレビュー報告
(1) 概要とコメント ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
(2) 平成30年度ピアレビュー実施状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
(3) 各部局の取組状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

4. アクティブラーニングの工夫
－5名の先生へのインタビュー－ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53

5. FD委員会について
(1) 活動概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
(2) 活動一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
(3) 委員構成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
(4) 委員会議事録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69

6. おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75

※Webページ掲載にあたって原本から一部削除した頁があります

第１章

はじめに

はじめに

副学長（教育・FD 担当）
FD 委員会委員長　　柳井　雅人

本学は文部科学省による大学教育再生加速プログラム補助事業を実施、運営しており、日本における教育改革を先導している。「『社会で求められる人材育成』を目指した学修成果の可視化の取組」としてテーマⅡを選択し、全学的な教学マネジメントの改善を図っている。この事業の根幹には、教育を通じた人材育成に関わる内部質保証システムの確立がある。そのためには３ポリ（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）の絶えざる見直しと、それを検証するため教育成果を可視化するという作業が必須となっている。

FD（授業改善）活動は、教育の質的改善と質の高い人材育成を行うための重要なツールであり、その手法について可視化するとともに、FD の成果を教職員全体で共有しながら、実践的に活用していくものにしていく必要がある。この活動自体が内部質保証を高度に保つための重要な作業となっているのである。

さて、従来の FD 活動報告書において指摘されるように、課題として、①FD に対する個人間、部局間の温度差、②FD の内容・方法の一層の工夫の必要性が認識されてきた。①については、教職員が内発的に FD 活動の必要性を感じ、主体的・自律的に取り組み、参画すべきであるとの考えがあり、各種の研修会や啓発活動が行われることを通して温度差を埋める試みがなされてきた。②については、研修や自主活動がルーチン化してきており、その効果を検証し、改善すべき時期に差し掛かっていると言える。

そのような中で、アクティブ・ラーニングに対応した新図書館も利用内容が充実し、FD 活動を遂行する設備や施設が頻繁に利用されており、実際に授業に活用しているケースも増えている。現在の中期計画においても、アクティブ・ラーニングの実施および充実が謳われており、このような環境を活かすかたちで、計画達成を図っていく必要がある。

さらに今年度において、Moodle や IC カードシステムの本格的導入、Wi-Fi 環境の整備などによって、教育環境も変化してきた。これを受けて FD 活動も質的に変化してきたと言える。FD 活動における情報システムの活用や授業での応用など、積極的に研修活動がなされてきたことは重要であり、この事業に積極的にご尽力された浅羽修丈先生をはじめ多くの先生方にはここで御礼申し上げたい。

2018 年度には新しい３つのポリシーも完成し、2019 年度より新カリキュラムもスタートする。また、アセスメントポリシーを整備しつつあり、これを土台として教育現場の質的改善と向上をめざすサイクルが出来上がってくる。教育の質的改善を図るために、教職員の認識が一致するよう、FD 活動を一層深めていく必要があろう。本学では他大学と異なり、教職員の創発から FD 活動を深めていく体制をとっており、ボトムアップからの現場感覚に基づいた実践的活動を主体としている。今後もこの取組みを一層深めていきたい。

最後に、熱心な FD 活動へのご協力を賜っていることについて、中溝幸夫先生をはじめ関係者の方々に対して、この場を借りて、厚く御礼申し上げる。

第２章

FD 研修報告

(1) 春季新任教員 FD 研修

■　日　時：2018 年 4 月 3 日 9:00 ～17:10

■　場　所：北方キャンパス　本館 E-512 会議室

■　研修のプログラムと担当者：

	プログラム内容	担当
1	北九州市立大学における FD 活動への取組と展望	柳井雅人 FD 委員長
2	今、大学教員に何が求められているか？	中溝幸夫 FD アドバイザー
3	模擬授業観察とピアレビューメモ	土井徹平准教授（経済学部）
4	グループ討論の説明	中溝幸夫 FD アドバイザー
5	グループ討論と発表 ・テーマ「授業をよくするための工夫」について ・グループ討論（80 分）、発表と質疑応答（40 分）	コーディネーター 中溝幸夫 FD アドバイザー
6	個人ワークと研修アンケート ・授業計画についての説明（10 分） ・研修アンケート（20 分）	

■　参加者数： 新任教員 6 名、他 11 名（既在籍教員）

■　研修の概要

研修内容は、ほぼ例年どおりであった。 (1)は「北九州市立大学における FD 活動への取り組みと展望」と題した FD 委員長による北九大の FD 活動の経緯と現在の FD 活動についての概要説明、(2)は FD アドバイザーによる『今、大学教員に何が求められているか？』と題して「FD とは何か」「なぜ必要か」「北九大の FD 活動の詳細」や「大学における授業の質の向上のための方法」などについての講義、(3)は土井徹平准教授（経済学部）による模擬授業と土井先生が授業でどんな点を工夫されているか、そのポイントの説明と新任教員との質疑応答、および新任教員による授業のピアレビュー・レポート作成。(5)は「授業をよくするための工夫」をテーマにしたグループ討論。(討論には 10 名の既在籍教員が参加した。) 討論の後、それぞれのグループから討論内容を発表してもらい、その内容について全員で質疑応答を行った。(6)の授業計画については、資料にもとづいて説明し、4 月末までに 1 学期に行う自分の科目の授業計画（1 コマ分）を提出すること、夏季研修では 1 学期の「授業の振り返り」をこの授業計画に基づいて行うことが新任教員に伝えられた。 最後に、新任教員を対象にして、今回の FD 研修についてのアンケート調査が行われた。

■　全体的コメントとアンケートの結果

本研修の狙いは、①新任教員に「本学の FD 活動および教育に対する取り組み」を理解してもらうこと、②「教育（授業）の質向上へのモチベーション」を高めてもらうこと、③教育をめぐって既在籍教員と交流することの三つであった。アンケート結果からは、これらの狙いがほぼ達成されていることがわかった。

研修プログラムの中で好評だった項目は、既在籍教員による授業（模擬授業）や実体験を聴きながら、また授業工夫をテーマにした既在籍教員とのグループ討論であった。例えば『授業に対するさまざまな教員の意見が聴けたこと。』『グループ討論で自己の疑問をぶつけることができ、それに対する明確な答えが聴けたこと。』などのコメントが新任教員から報告された。

一方、改良点としてはグループ討論のテーマ、位置づけ、時間配分などをもう少し工夫する必要があること。FD アドバイザーの講義時間が不足したため、資料の説明が不足したことなどがあった。また、国際環境工学部の先生の模擬授業への要望もあった。

(2) 夏季新任教員研修

■　日　時：2018年8月30日(木)　10:00 ～ 16:15

■　場　所：北方キャンパス　本館E-512会議室

■　研修テーマ：『１学期授業の振り返りと授業工夫の共有化』

■　研修目的：1学期に新任教員が行った授業について、＜授業設計＞＜授業工夫のポイント＞＜授業実践結果＞＜改善計画＞などを報告し、その内容について質疑応答することによって授業工夫へのモチベーションを高め、また授業工夫についての情報を共有化すること。またグループ討論によって、さまざまな工夫や問題を共有し合うこと。

■　研修のプログラムと担当者：

	プログラム内容	担当
1	１学期授業の振り返りについて、 新任教員の個人発表（一人20分×6名）	コーディネーター 中溝幸夫FDアドバイザー
2	小グループ討論　(A, B グループ各5名、80分) ・テーマ『授業において学生の主体的学びを促進させるために教師が考えるべきことは・・・？』	
3	全体討論（80分） ・小グループ内での討論のまとめの発表と質疑	

■　参加者：新任教員6名、他9名（既在籍教員、FD副委員長、アドバイザーを含む）

■　内容の要約

本研修の主目標は、新任教員の『授業の振り返りと情報共有』であった。新任教員は、4 月の春季 FD 研修で計画した授業を実践してみて、どんな結果が得られたかを報告し、その内容について、全員で質疑応答した。その後、2 グループに分かれて、『授業において学生の主体的学びを促進させるために教師が考えるべきことは・・・？』というテーマについてグループ討論を行った（約1時間 20 分)。討論した後、その内容をグループごとに発表し、全員で質疑応答した。

■　研修結果とコメント

研修アンケート回答者10名（参加者12名）のうち、全体的印象として「非常によかった」(2名)「まあよかった」(6名)「あまりよくなかった」(2名）であった。「よかった」理由の主なものとしては、『各講義の工夫を直接聞けたのが良かった。』『講義内のポイントがわかりやすかったため、模擬講義形式での報告が有益だった。』『グループディスカッションで、講義全体のみならず、各回のゴール設定を明確にして、その都度、達成度を確認することの重要性がよく分かった。』などがあった。また、「よくなかった」理由は、『あまりに専門が異なる教員が議論すると、どうしても空虚な一般論になりかねない。』『文理では扱う業務内容があまりに違い過ぎるし、個別性が強いので、普遍的な議論をしようとすると当たり前の話しかできない。』などがあった。

本研修から何を学んだかという質問に対する回答 ― 例えば『授業中に学生の間で意見交換させるのを多くの先生がやっていて、自分の授業でも取り入れたい。』― などから、本研修の目的の一つである『授業工夫の共有化』は、ある程度、達成できたと言えるだろう。

本研修の改善意見としては、『新任教員にとって、この時期は後期の準備もあり忙しいので、もっと負荷を軽くする形式にしていただきたい。』や『もう少し時間を短縮してもらいたい。午前中に効率よくまとめてやる等。』等があった。これらの意見は、来年度の夏季研修で考慮すべきことかもしれないが、これ以上、時間を短縮すると内容がひじょうに薄いものになってしまい、研修の効果が失われるような気がする。

また『グループ討論は、文系教員と理系教員それぞれの専門分野があまりにも違うので、文系、理系の教員を分けてグループ討論したほうがよい。』という意見もあったが、文系、理系の教員がお互いの授業を報告しあう機会は非常に少なく、本研修はそのよい機会なので、私自身は現状のままでよいと考える。

研修時期については、昨年のこの研修が学会参加などの理由で参加者が少なかったので、8 月下旬に設定した。また、2 年目教員への呼びかけを行ったので例年よりも 2 年目教員の参加が増えたことはよかったと思う。

またアンケートへの意見として、『授業報告は、教師の授業報告ではなくて、実際に行っている授業そのものをこの場で再現したほうが興味がわくのではないか。』というものもあった。こういう意見を取り入れて、来年度に向けて本研修を改善する余地があると思う。

(3) Moodle活用実践事例とアクティブ・ラーニング

■ 日　　時：2018年10月3日（水）13：30～15：00

■ 場　　所：北方キャンパス　本館C-401教室

■ 主　　催：基盤教育センター、地域創生学群、情報総合センター

■ プログラム

1	講習会	浅羽　修丈（基盤教育センター　教授） 西田　心平（基盤教育センター　准教授）
2	質疑応答	1の内容について

■ 参加者数：135名

（内訳）

外国語学部英米学科	9名
外国語学部中国学科	5名
外国語学部国際関係学科	7名
経済学部経済学科	13名
経済学部経営情報学科	11名
文学部比較文化学科	14名
文学部人間関係学科	11名
法学部法律学科	16名
法学部政策科学科	7名
地域戦略研究所	4名
国際教育交流センター	2名
基盤教育センター	27名
キャリアセンター	1名
マネジメント研究科	5名
地域共生教育センター（特任）	1名
421Lab.	1名
非常勤講師	1名

■ 研修の概要

本研修は、FD委員会（地域創生学群・基盤教育センター）と情報総合センターとの共催で開催された。今回は第1部と第2部に分かれており、第1部は「Moodle活用実践事例Ⅱ」として、浅羽修丈教授によるNew Moodleの活用方法についてのレクチャーがあった。第2部においては、地域創生学群（基盤教育センター所属）の西田心平准教授から「高校教育におけるアクティブ・ラーニングの現状と課題」について、実際にアクティブ・ラーニング型の研修として実施された。第1部と第2部とで多少、内容を異にするものではあったが、今回の内容に関して、必

修FD研修を何回かに分けて行うことに比べ効率的に実施できると考え、このような2部制として実施した。その概要は、以下の通りである。

【 浅羽修丈教授の内容 】

① 北方Moodleから New Moodleへの移行に関する変更点について

② 北方Moodleから New Moodleへのデータ移行の仕方について

③ New Moodleを活用して、提出された課題を受講生に添削後に返却する方法について

【 西田心平准教授の内容 】

① 高校教育におけるアクティブ・ラーニング導入における背景と課題について

② 大学と高校の高大接続に関する課題について

③ 高校におけるアクティブ・ラーニングによって、主体性を引き出すための具体的取り組みの一事例の紹介

④ アクティブ・ラーニングの体験によるFD（授業改善）の意見交換の機会の提供

⑤ New Moodleを活用したグループ学習成果の共有の手法の体験

■　全体的コメントと反省

浅羽先生の研修内容の目的は、教員の皆さんにNew Moodleへの移行をスムーズに行い、授業へ活用して頂けるようにするためのレクチャーが中心であった。一方、西田先生の目的は、教員の皆さんに「学生側（受講生）の立場に立ち、アクティブ・ラーニング」を体験してもらう事によって、日頃、学生たちが感じている気持ちを実感して頂くことにあった。

また、回答いただいた項目の内、研修が「良かった（大変良かったを含む）」とお答えいただいた回答数や、授業の参考になったかの問いに「参考になった（非常に参考になったを含む）」とお答えいただいた回答数が、ともに全体の80%以上であったことを考えると、開催時期や開催目的の意図の一層の周知など改善すべき点があるとはいえ、非常に好評のFD研修とすることが出来たのではないかと考えている。さらに、以下に記載されているアンケートの結果を見ると、一部ではあるが本研修内容において批判や改善点を頂く事ができた。もちろん、FD委員会として、より効果的な研修とするべく努力を一層払う必要があると同時に、今回頂いたご意見は「日常の授業を受けている学生」が感じる意見である可能性もある。学生側の立場に立って、実際に経験してみる事で、アクティブ・ラーニングに慣れていない方にとっての億劫さ、授業内容の意図に関しても教員側が伝えていると思っていても思いの外、受講生には理解されていないということが往々にしてあるという事が実感できたのではないだろうか。我々実施側の教員も、今回のFD研修の企画を考えていく中で、自分の担当する授業の進め方などについても再考する機会となった。参加者の皆さん方にも、今回の研修で教員同士での意見交換や実際に学生の立場に立った体験をすることで、日頃の授業内容の改善に繋げられるきっかけとなれば幸いである。

第３章

授業のピアレビュー報告

(1)概要とコメント

以下に示す授業のピアレビュー実施状況報告は、平成30年度における各部局学科ごとに行われているピアレビュー活動の報告である。“授業のピアレビュー”（教員相互の授業公開・参観・授業改善のための研究会）は、適切に行えば授業の質向上にとって効果的な方法の一つである。同僚の授業を参観したり、同僚に自分の授業を公開することは、授業の振り返りに大いに役立つであろう。しかし、多くの仕事を抱えている教員にとっては、これらの活動を持続的、効果的に行っていくことは時間と忍耐を要する困難な活動である。現在、授業のピアレビューの具体的方法（担当者、回数、やり方など）については、それぞれの部局・学科の方針に基づいて独自に行われている。実施状況の回数を見る限り、学科の“温度差”が表われている。

「授業のピアレビュー」とは、教員組織として授業設計、授業方法、学習評価などの質を向上させていく地道なFD活動だ。つまるところ、授業の質向上の“目的”は『如何にして学生の学びの質を向上させるか』ということである。この意味で『学生の学び』を授業設計（計画）の中心において授業のいろいろな側面から工夫していくことは、大学教師の義務だと考える。この視点に立って授業のピアレビューを行うことが重要だと思う。

また、同僚や自己の授業の参観・公開よりももっと簡便な方法は「自分の授業参観」である。自分の授業をビデオカメラに撮って、それを自分で見て観察し、いろいろな改善点を見つける。これを実行するだけでも非常に有効な授業改善ができると思う。

(FDアドバイザー)

(2)実施状況

部局		実施授業回数
外国語学部	英米学科	8
	中国学科	1
	国際関係学科	2
経済学部	経済学科	8
	経営情報学科	6
文学部	比較文化学科	6
	人間関係学科	2
法学部	法律学科	2
	政策科学科	2
地域創生学群	地域創生学類	5
国際環境工学部	エネルギー循環化学科	5
	機械システム工学科	10
	情報メディア工学科	8
	建築デザイン学科	10
	環境生命工学科	6
基盤教育センター	教養教育部門	3
	情報教育部門	1
	語学教育部門	9
	ひびきの分室	2
マネジメント研究科		4
社会システム研究科		1
法学研究科		2
合計		103

(3)各部局の取組状況

平成30年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	外国語学部	学科等	英米学科

2．部局の実施方針、方法

5年前から、各学期それぞれ複数名の先生に、授業を行う先生方と参観をなさる先生方で組を作っていただき模擬授業をしていただき、各学期それぞれの組で授業を行って参観をしていただき（但し、授業や出張で不在の者は除く）ピアレビューを行うというシステムをとっています。それにより、模擬授業を行う教員は、参観者の指摘により自分の長所と短所を知り、また参観者は、他の教員の授業に接することで、その長所を自分の授業に積極的に取り込むことが可能になります。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	異文化フィルドワーク	2	5	11			
2	基礎演習I	2	26	12			
3	Advanced English I	2	20	13			
4	言語と認知	2	240	14			
5	メディア英語演習	2	39	15			
6	Advanced English II	2	16	16			
7	基礎演習Ⅱ	2	24	17			
8	社会言語学	2	75	18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

高い評価がそれぞれ非常に多かったと言えます。例を挙げると、「基礎演習Ⅱ」では、「Dr. Hirano was extremely well-prepared for the class. Her power point slides were full of interesting examples from a wide variety of ethnic Englishes. Dr. Hirano got the students involved in the lecture by having them read the information on the slides.」。「基礎演習Ⅱ」では、「 I very much enjoyed the lesson because it explained general and specific aspects of storytelling. The students were given proper time to complete the book’s exercises. Followed up on the students’ progress and checked the answers of the textbook. Presented excellent examples and entertaining explanations about storytelling.」。「異文化フィルドワーク」では、「生活や旅行、文化や習慣の違い、帰国後の苦労といった様々な視点から自分の経験を英語でわかりやすく語ったことは高く評価できる。またプレゼンテーションの準備もしっかりできていた。学生が英語でプレゼンテーションを行う機会を設けることは、英語の学習面においても大きな効果があると考える。」

5．成果と課題

今年度ピアレビューで授業を行ったのは、それぞれが授業に定評があり、それぞれが英米学科の主要科目であった。参観する教員の立場から見て、共に非常に学ぶところの多い授業であったと言えよう。そうしたところから見ても、今年度の英米学科のピアレビューは大きな成果をあげたと総括出来る。これはぜひ来年度も継続していきたい。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	外国語学部	学科等	中国学科

２．部局の実施方針、方法

学科所属教員が少ないため、例年、１年に１回（通常、２学期）、ピア・レビューを実施しているが、未参加の教員も含め、学科会議の中で時間を設けて、質疑応答、意見交換などを行い、教員相互の教育技法の改善をはかり、合わせて授業態度、出席状況など、学生に関する情報共有を行っている。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	中国語初級総合Ⅱ	4	20	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

教授内容が多いにもかかわらず、テンポ良く時間が流れ、あっという間の90分であった。受講生の緊張感が途切れることもなかった。用意の周到さを感じたと同時に、授業準備に費やされる時間もかなりのものがあると予想されたが、若干詰め込み過ぎの印象があった。習得の難しい文型をPPTで例文を多く提示して、説明は簡潔に行っていた。単なる文法説明にとどまらず、受講生の視野を広く持たせ、語学を学ぶ楽しさにつながると思われた。授業では繰り返しの復習が行われていたが、２年次の中国語クラス担当者としては、繰り返しの復習を初級のうちから学生自身が行えるようにしておいてほしい。

５．成果と課題

本学科は専任教員数が少ないことから、年に１回のピア・レビューを行っているが、１回のピア・レビューで内容の濃い議論を行うことを重視している。
所属教員の授業時間が重なることが多く、毎年度、参加できる教員が1、2名であったが、今年度は4名の参加があり、また、その後の学科会議で時間を取って学科全体で総括を行った。十分な意見交換と情報共有が行われたと思う。特に、中国語の科目は複数の教員が担当しており、また互いに関連しているので、より細かな意見交換ができたのは双方にとって有益であった。
その一方で、一度もピア・レビューを受けていない教員も複数いる。どのようにして全員に参加してもらうかが課題である。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	外国語学部	学科等	国際関係学科

２．部局の実施方針、方法

本年度は新任教員もいないため、冒険的な内容とした。一つは、必修科目で行われる二年次学生全員参加のプレゼンテーション大会、もう一つはチーム・ティーチング形式の講義科目でおこなった非常勤講師と専任教員とのピアレビューである。専任講師同士のピアレビューは、チーム・ティーチング形式の講義科目で日常的に行っているので、こうした新しい形式に取り組むことにした。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	基礎演習	10	91	11			
2	英米文化概論 II	2	79	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

プレゼンテーション大会を素材にしたピアレビューでは、大会の運営、個々のプレゼンの評価とともに、この大会準備に取り組んでいる基礎演習の内容改善に向けた提言が行われた。英米文化概論IIでは、教案を協力してつくった上で、その反省を行い、プレゼンテーションの質、教材の適切さについて、相互のコメントを行った。

５．成果と課題

チーム・ティーチングをＦＤの基礎とすることは、本学のＦＤ委員会の創立以来、唱えられてきたことであり、その本義に戻って、非常勤講師との間で、実施を試みた。また、プレゼンテーション大会は毎年の開催であるので、授業内容の改革のためにも、こうした取り組みが大切であると感じる教員が多かった。単に、ピアレビューをする授業の数を増やしても、学科の教育プログラム改善に効果はなく、かえって個々の教員の士気が低下するので、学科教員にその意義を納得してもらった上で、多くの者が前向きに取り組むピアレビューを実施することが課題であろう。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	経済学部	学科等	経済学科

２．部局の実施方針、方法

経済学部全講義を対象とする（ただし担当教員の事前の了承を得ることとする）。
その上で、経済学部教員は学期に1回、計年2回ピアレビューを実施することとし、新任教員がいる場合には年2回の内1回は新任教員の担当講義を見学することにより、新任教員研修も兼ねることとする。なお、実施に際して、特に学科の区別はせず、一方の学科教員は他学科の授業を見学することも可能とする。
他大学の授業聴講も可とし、また講義聴講という形でなくとも、たとえばオープンキャンパスの模擬講義・演習の聴講等、幅広く可としている。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	ディズニーランド（オープンキャンパス模擬講義）	2	100	11			
2	オープンキャンパス模擬講義	1	70	12			
3	簿記論Ⅰ	3	150	13			
4	入門演習プレゼン大会決勝	3	150	14			
5	経営組織論	1	80	15			
6	専門演習Ⅱ	1	15	16			
7	簿記論Ⅱ	3	150	17			
8	ポスターセッション大会	1	—	18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

●高校生が興味を持つタイトルで、かつ内容も高校生でも分かりやすかったと思う。
●最初から受講者の集中力を高める手法が印象的であった。ぜひ学びたい。
●どうすれば、あのようにいいプレゼンができるよう指導できるのか、今後知りたいと思った。
●私が受けもっているものと科目特性は異なるが、講義の合間に手を動かす時間があるというのは利点があると感じた。
●学生が気づいていない点、改善する点を分かりやすく伝える指導方法が参考になった。
●スライドを使うところと使わないところを分ける、宿題などを自分の講義に導入したいと思いました。
●学生のゼミ運営および卒論の指導にも示唆的な取り組みであり、今後の指導に大変参考になった。

５．成果と課題

聴講した各教員は、学生の興味・関心を引くにはどうしたらよいか、演習でどうしたらよいか等について、新たな知見を得ている。
今年度も新任の先生の授業について、オープンなピアレビュー日を設定し、多くの教員が参加した。講義の合間に手を動かすことの重要性やスライドと板書の併用の工夫などから、多くの刺激を受けたようである。
さまざまな機会が教員にとっても学びの機会になりえるので、来年度はさらにピアレビューの対象を拡大することも考えられる。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	経済学部	学科等	経営情報学科

２．部局の実施方針、方法

経済学部全講義を対象とする（ただし担当教員の事前の了承を得ることとする）。
その上で、経済学部教員は学期に1回、計年2回ピアレビューを実施することとし、新任教員がいる場合には年2回の内1回は新任教員の担当講義を見学することにより、新任教員研修も兼ねることとする。なお、実施に際して、特に学科の区別はせず、一方の学科教員は他学科の授業を見学することも可能とする。
他大学の授業聴講も可とし、また講義聴講という形でなくとも、たとえばオープンキャンパスの模擬講義・演習の聴講等、幅広く可としている。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	簿記論Ⅰ	5	150	11			
2	入門演習プレゼン大会決勝	6	150	12			
3	簿記論Ⅱ	5	150	13			
4	ポスターセッション大会	3	—	14			
5	マクロ経済学Ⅰ	2	150	15			
6	プロパー職員対象リーダーシップ研修	1	7	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

●レジュメも整理されて見やすく、特に「アドバイス」、「ポイント」、「考え方」などを分かりやすく示しており、学生は大変わかりやすいモノとなっていました。
●２００を超えるアンケートをしたチームもあり、努力を感じた。一方で、それ程の規模のアンケートならもう少し詳細な分析ができるのではないかと感じた。
●学生に親身な授業スタイルを心掛けられていると感じた。
●途中で一部だけパワーポイントを入れて説明されており、準備は大変だと思うが、テンポがよくなり、よい取り組みだと感じた。
●受講者はGDPという語くらいはどこかで聞いたことがあると思うが、この講義を受講することで、より本質的なところまで学ぶことができたと思う。

５．成果と課題

聴講した各教員は、学生の興味・関心を引くにはどうしたらよいか、演習でどうしたらよいか等について、新たな知見を得ている。
今年度も新任の先生の授業について、オープンなピアレビュー日を設定し、多くの教員が参加した。親身な授業スタイル、パワーポイントと板書の併用などの工夫から、多くの刺激を受けたようである。
さまざまな機会が教員にとっても学びの機会になりえるので、来年度はさらにピアレビューの対象を拡大することも考えられる。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	文学部	学科等	比較文化学科

２．部局の実施方針、方法

学外で実践されている講義方法にも視野を向けるべきであり、そのため、外部から講師をお招きして講義を御担当いただく際には、積極的にピアレビューを実施しようという方針が学科のFD懇談会にて提示された。そのため、今年度も昨年度に引き続き、ピアレビューを実施した科目のほとんどが、外部講師に御担当いただいた際のものであった。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	世界の文化遺産（4月20日）	1	114	11			
2	世界の文化遺産（5月11日）	1	114	12			
3	博物館実習Ⅱ	1	10	13			
4	比較文化入門２	1	154	14			
5	比較文化概論	8	156	15			
6	日本文学概論	3	61	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・講義の導入部分、或いは、講義の要所において、学生にとって身近な題材を提示し、それによって、受講者たちの興味関心を引き付けた上で、専門的な考察方法や知識を学び取らせるという構成になっており、自身の講義においても応用したいと感じた。
・豊富な画像資料や多色刷りの統計資料を駆使した講義方法がとられており、それらの資料の用い方の参考になったと同時し、それらの資料が、受講者の興味や好奇心を刺激し、彼らの集中力を継続させることに有効に作用することが理解された。
・講義内容の理解の深化にも寄与しながら、受講者各自に熟慮と参加・創作を促す優れたアクティヴラーニングが実施されており大変参考になった。

５．成果と課題

外部講師の方々は、いずれも本学での講義は各一回であったため、大変綿密な準備をされて講義に臨まれており、そのような講義準備の姿勢が参考になったという意見が複数に及んだ。特に、受講者各位に講義分野に興味をもってもらうことと同時に、講義内容をより深く理解してもらうことを目的として、講義内容の理解を助けるプリントや、多数の画像資料が的確に使われていたことは大変勉強になった。

今年度は、外部講師や部局内のベテランの教員による科目に対して実施したため、聴講した教員が学びとるばかりであったが、来年度は、着任年数の浅い教員に対して、講義をより良くするための助言等をするためのピアレビューも実施すべきように思われる。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	文学部	学科等	人間関係学科

２．部局の実施方針、方法

本年度は、1学期と2学期の双方において、新しく採用された教員の授業をピアレビューの対象科目とした。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	基礎心理学	2	92	11			
2	教育心理学	2	43	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

講義内容に関する具体例を数多く提示することで、受講生の理解を深めるような取り組みがなされていた。少人数での討論や仮説実験授業といった手法によるアクティブラーニングが実践され、受講生が主体的に授業に取り組んでいる様子が窺われた。

５．成果と課題

ピアレビューを実施する際には、かなり早い時期から学科教員に実施の告知をしているところであるが、実際に参加する教員数がきわめて少ない。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	法学部	学科等	法律学科

２．部局の実施方針、方法

法学部は、法律学科と政策科学科の2学科で構成されているが、基本的に、両学科で共通のことをやることが多い。ＦＤのピアレビューに関しても、法学部の伝統に基づき、この原則に則り、各学期で、各学科から1科目を選んで、ピアレビューを実施した。ただ、今年度は新たな試みとして、複数の若手教員による交流授業の形式（ピアレビュー参加教員が、対象の授業を聞いているだけでなく、授業そのものに参加する。）でピアレビューが行われた点は特筆すべきことである。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	日本国憲法原論（１学期）	4	300	11			
2	刑法犯罪論（２学期）	2	260	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

ある一定の学術的内容に対し、複数の視点からの世界を見せるという意味で有意義なものとなった。
教員によって意見の食い違いが発生することこそが、「単に教員の話をメモするだけの授業から、自分自身で考える契機となる授業になる」という意味で、極めて（知的に）積極的な参加を求める授業になったと思われる。ただし、今回は論点設定によってはあまり教員間の意見の差がでなかった論点もあり、今後同様の試みを行うに当たっては留意が必要になろうと思われる。
秦講師を中心として実践された、Twitter連携の授業運営も、双方向性の確保につながった。

５．成果と課題

１学期のピアレビューは、単に参加教員が授業を観察するだけではなく、交流授業形式として、教員らが授業そのものに参加する試験的な試みとして合同で展開した。２学期は、法律学の伝統的な講義スタイルの授業についてピアレビューを行なった。いずれも、学生が法律学を学ぶ上での基本中の基本となる１年生科目であり、基本的内容の教育の方法について再確認できた点が成果であったと言える。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	法学部	学科等	政策科学科

２．部局の実施方針、方法

法学部は、法律学科と政策科学科の2学科で構成されているが、基本的に、両学科で共通のことをやることが多い。ＦＤのピアレビューに関しても、法学部の伝統に基づき、この原則に則り、各学期で、各学科から1科目を選んで、ピアレビューを実施した。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	政治学（1学期）	4	300	11			
2	政策分析入門（2学期）	2	80	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

ある一定の学術的内容に対し，複数の視点からの世界を見せるという意味で有意義なものとなった。教員によって意見の食い違いが発生することこそが，「単に教員の話をメモするだけの授業から，自分自身で考える契機となる授業になる」という意味で，極めて（知的に）積極的な参加を求める授業になったと思われる。ただし，今回は論点設定によってはあまり教員間の意見の差がでなかった論点もあり，今後同様の試みを行うに当たっては留意が必要になろうと思われる。
前期の政治学ピアレビュー時に秦講師を中心として実践された，Twitter連携の授業運営も，双方向性の確保につながった。

５．成果と課題

今期は両学期とも，単に参加教員が参観するだけではなく，交流授業形式として，教員らが授業そのものに参加する試験的な試みとして合同で展開した。ある教員の担当科目に，別の教員が登壇するという形である。前期は複数教員が合同で，後期は別教員を主たる登壇者として本来科目担当者との質疑応答を行うという形である。授業内容は教員の研究内容にも関与する物となったが，それがかえって学生の関心を引き付けるには効果を発揮したことがコメントカードなどより実証されている。授業への関心惹起というFD活動の一目的からすれば，本方式は有効なように思われ，来年度以降も様々な形式を試行していきたいと考えている。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	地域創生学群	学科等	地域創生学類

２．部局の実施方針、方法

地域創生学群は他部局と異なり、地域活動が必修科目となっている。そのため、本学群においては、「活動からの学び」を効果的に定着させるための「振り返り」の意義とその技法を共有（地域学入門）し、2学期においては各実習科目（地域創生実習および地域マネジメント実践論）においてピアレビューして、その効果の検証を複数の教員で実施した。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	地域学入門	4	120	11			
2	地域創生実習（小倉）	1	15	12			
3	地域創生実習（広報）	1	15	13			
4	地域創生実習（学びの支援）	1	14	14			
5	地域創生実習（猪倉）	2	30	15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

地域創生学群の教育プログラムの特徴である実習科目における教育指針について、他教員の授業をピアレビューすることによって、共有することができた。複数の実習に参加することで、自分が行う場合との差異を感じ取ることができて、大いに参考になった。

５．成果と課題

地域創生学群の実習科目は、実際に地域に出て活動する授業内容である。土日に活動がある場合は、その活動量を鑑み授業時間を振替することもある。アクティブラーニングの広まりを契機に、より活動的な授業運営が増えると思うので、今後のピアレビューのやり方やフォーマットの形式など、実習系授業のピアレビューをする際にはそれに適応した形を検討したほうが良いという意見があった。

平成30年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	エネルギー循環化学科

2．部局の実施方針、方法

ピアレビュー実施方針に則り、前期2科目、後期2科目に加え、初めて対象となる実習科目を1科目加え、計5科目を実施した。事前に日程調整を行い、学科教員が公開者・参観者のいずれかでほぼ全員参加する形で実施している。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	物理化学演習	2	50	11			
2	微分・積分（化学・生命）	2	123	12			
3	環境分析実習	1	45	13			
4	無機分析化学演習	1	52	14			
5	エネルギー・廃棄物・資源循環概論	1	47	15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

講義内容・進行などについては大きな問題の指摘はない。学生の出席率や受講態度もアンケートの数字から想像されるような悪いものではなかった。微分積分のような科目に関しては学生の得手不得手が表に出やすいが、教員の努力により講義の密度は向上する傾向にある。一方で学生の遅刻や授業へ集中できていないなどの状況が生じると、高密度ゆえに授業に脱落しやすくなるという側面も生じている。近年、学生の成績が二極化する傾向にあるため、学生の学力差を生まないような高理解度へ誘導する講義というものを目標にしたFDが必要かと思う。

5．成果と課題

環境分析実習を除く4科目は回答数5件など（受講者数全体の10%以下）と回答率が極めて低く学生全体の意見を反映しているとはとても言えない基準で選定されたものである。参観の実施に異論が多数出る中参観は実施されたが、その結果、どの科目でも講義に十分な工夫が見られると評価され、講義内容と少数学生の評価には相関が無いことが確認された。昨年は通常の評価が得られており、アンケートのweb化に伴って生じた低回収率（平均2～3割）から生じたブレであったと考えられる。
実習科目では基本の重点項目がほとんど内容として対応しておらず、今回は安全項目の評価だけとなった。実習用シートを新設定し来年以降につなげたい。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	機械システム工学科

２．部局の実施方針、方法

本年度の実施方針は、これまで実施していない機械工学実験Ⅰ・Ⅱの実験科目を対象としたピアレビューを行うこととした。多くの学科内教員が出席できるよう、原則として各講義は2回実施した。1回目の講義に参加できなかった教員は2回目に出席するよう案内した。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	機械工学実験Ⅰ（燃料の発熱量測定実験）	6	41	11			
2	機械工学実験Ⅰ（表面粗さ及び硬度測定実験）	5	5	12			
3	機械工学実験Ⅰ（1自由度振動系の想定実験）	6	10	13			
4	機械工学実験Ⅰ（風洞内の流れの測定実験）	5	41	14			
5	機械工学実験Ⅰ（引張り強度測定実験）	5	41	15			
6	機械工学実験Ⅱ（蒸気圧の測定実験）	2	6	16			
7	機械工学実験Ⅱ（風洞特性の測定実験）	2	6	17			
8	機械工学実験Ⅱ（形状記憶合金の変形エネルギーの温度依存性実験）	4	6	18			
9	機械工学実験Ⅱ（回転機械・構造物の振動実験）	3	5	19			
10	機械工学実験Ⅱ（計測・制御のための基礎実験）	4	6	20			

４．出された主な意見、コメント

どの実験も当日の実験内容の位置づけを明確にするための説明や学生の理解度向上のために具体的な工夫が見られ、関連した意見が多く見られた。具体的な工夫としては、高校と大学で学習する内容の違いに焦点をおいた説明から実験の目的に入る導入の仕方、ホワイトボードを用いた学生とのやり取り、視覚教材の活用方法、などがあった。改善を求めるコメントとして、TAの説明方法（声量など）、実験の全体像の説明が不足している、実験の役割分担が明確でないため実験をしている人と眺めているだけの人に分かれている、などがあった。

５．成果と課題

実験の背景や理論などの理解度向上や学生の興味を引くために具体的な工夫を実際に見学することができ参加者にとって有意義なピアレビューであったと思われる。また、実験開始前の説明方法、TAトレーニング手法、実験の役割分担、など多くの具体的な実験改善の提案もされており、ピアレビュー担当者の次年度以降の講義改善の参考にもなったものと思われる。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	情報メディア工学科

２．部局の実施方針、方法

今年度は、大学院・通信メディア処理コースの授業を対象としてピアレビューを実施した。また、昨年度の学生アンケートで低評価であった学部のプログラミング系の授業を対象としてピアレビューを実施した。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	情報通信論	4	34	11			
2	情報セキュリティ論	3	7	12			
3	ソフトウェア設計・同演習	2	85	13			
4	画像処理	2	14	14			
5	ネットワークアーキテクチャ	2	28	15			
6	プログラミング・同演習	2	85	16			
7	パターン認識応用	3	20	17			
8	視覚情報処理	1	18	18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

大学院の授業については、肯定的な意見が多かった。
例）
・少人数教育の特徴を生かしてしている（情報セキュリティ論）
・学生にとって興味深い対象を題材としている（画像処理など）
・スライド、板書などをうまく使い分けている（情報通信論など）

学部の授業については、ソフトウェア設計・同演習では学生間の温度差が指摘されたが、プログラミング・同演習では肯定的な意見が多かった。
例）
・前方と後方の学生で授業態度に大きな差がある（ソフトウェア設計・同演習）
・学生のレベルに適した課題が設定されていた（プログラミング・同演習）

５．成果と課題

大学院の授業では、実施形態に合わせて様々な工夫が行われていた。学生にとって興味深いテーマを提示しながら、スライド、板書、プログラムコード、デモンストレーションなどをうまく織り交ぜる取り組み内容を、若手教員を中心に教員間で共有できたことは大変有意義であった。学部のプログラミング系の授業では、学生の修学状況に差が生じやすいが、それを埋めるための工夫が用意されていた。一方で，グループワークに比べて、個人ワークでは上位と下位の学生の差が大きく、下位の学生をいかに押し上げていくかが今後の課題である。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	建築デザイン学科

２．部局の実施方針、方法

本年の建築デザイン学科のFD活動の方針は、今までの学科におけるFD活動が学部授業を主たる対象としていたことに鑑み、今学期は大学院における授業のレベルの向上のために、「可能な範囲で大学院の授業科目に関してもピアレヴューを行う」という方針を立て、ピアレヴューを実施した。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	環境工学実験	1	53	11			
2	音と光の環境デザイン特論	1	21	12			
3	コンクリート系構造の設計	1	51	13			
4	環境空間設計学	1	14	14			
5	耐震構造学	1	21	15			
6	見学ＷＳ演習Ｉ	2	54	16			
7	建築材料実験	2	57	17			
8	環境設備演習	1	10	18			
9	建築材料実験	2	57	19			
10	建築材料実験	2	57	20			

４．出された主な意見、コメント

今回は本年度の目標であった、大学院の授業に対するピアレヴューは3件実施された。大学院では、学部より学生数が少ないので、授業運営の仕方や、学生の授業に対するコミットメントの在り方も異なるため、学部生対象の授業とは異なる事象が伺えた。特に専門分野の分化した大学院においては、専門の異なる学生の履修もあるため、その対応に苦心して工夫している教員も見受けられた。また、履修人数が少ないメリットを生かして、よりケアの行き届いた授業を実施している様子が伺えた。

５．成果と課題

大学院の授業の運営の仕方は、内容、履修者の属性、履修者の人数から、当然ながら学部の授業とは異なる工夫が必要になってくるので、大学院の授業のピアレヴューは今後も継続され、より多くの教員が実施することが望まれる。その工夫は水平展開して、アクティヴラーニングの進展が期待される学部教育にも応用されることが期待されると考えられる。　学部のレヴューでは各教員は学生の習熟度を高めるためにさまざまな工夫を行っているが、修学意欲の低い学生に対する対応で苦慮していることが伺えた。今後は、授業の枠を超えて、学生に学修に対する動機付けを行えるような、授業を横断したプログラムやフォローが必要であると考える。特にいったん修学意欲が下がった学生に動機づけを行うことや、修学意欲の低い学生が、他の学生に影響を及ぼして、修学意欲の低い学生の群が発生している傾向に対して、なんらかの対策を行った方が良いと考える。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	環境生命工学科

２．部局の実施方針、方法

経験の豊かな教員が若手教員のピアレビューに参加すること、また専門分野の近い教員間で相互にレビューを推奨した。このことにより、教員間で、教育に関するノウハウや知見の交換が可能になると考えた。また学部の講義だけでなく大学院講義も対象とし、さらに講義だけでなく実習や演習もピアレビューの対象とした。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	生理学	1	40	11			
2	環境応答生理学	1	5	12			
3	環境生物学	2	20	13			
4	一般物理学	1	51	14			
5	環境生命工学実習	1	48	15			
6	応用数学演習	1	48	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

●内容の説明にとどまらず、原理等にまで戻って説明されており、より学生の理解を深めていると思いました。●一つの内容を「説明」、「発表させる」、「レポートを書かせる」という繰り返しの工夫は、特に良い工夫だと思い、参考になりました。●（留学生に対する講義において）英語と日本語のバランスの良い説明だけでなく、受講生の専門（back ground）を考慮して対応されており、とても参考になった。　●受講者が理解しやすいよう，板書とスライドを組み合わせ，丁寧な講義を心掛けられている。などのコメントがあった。

５．成果と課題

公開アナウンスをしても参加者が出ないため成立しないケースもあった。今後、ピアレビュー公開の件数および参加者の増加が望まれる。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	教養教育部門

２．部局の実施方針、方法

本学における他の教員の授業を少なくとも１回ピアレビューするか、もしくは、自らの授業を１回ピアレビューしてもらう。なお、本報告書には、地域創生学群(教養・情報教育部門に所属する教員の半数が兼任)におけるピアレビューに参加した教員については記載しない。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	生命科学と社会（担当教員：日高京子）	1	478	11			
2	生命科学と社会（担当教員：神原ゆうこ）	1	478	12			
3	政治の中の文化	1	40	13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・学生の集中力が途切れないよう、講義に関連するMoodle課題への言及やニュース記事の紹介などがあり、自身の授業設計の上でも参考になった。
・新聞記事の紹介など、学生が資料を読んで考える時間を十分に与え、能動的に取り組む機会を設けており、大変参考になった。
・中間テストの解説がとても丁寧に行われており、この解説自体が授業全体のまとめともなっていた。中間テストの活用方法・役割を改めて認識できた（中間テストは、単に学生の理解度を確認するためだけのものではないことを改めて確認した）。

５．成果と課題

出された主な意見、コメントを拝見すると、資料を読む時間を与えたり、中間テストを上手に活用したりなど、学習者が能動的に取り組む工夫が多く取り入れられていたことが見受けられる。
Moodleを活用した授業も展開されており、アクティブラーニングに積極的に取り組んでいることが大きな成果である。今後は、基盤教育センター全体で、今まで以上にアクティブラーニングに取り組み、ピアレビューを通じて授業改善に取り組んでいきたい。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	情報教育部門

２．部局の実施方針、方法

本学における他の教員の授業を少なくとも１回ピアレビューするか、もしくは、自らの授業を１回ピアレビューしてもらう。なお、本報告書には、地域創生学群(教養・情報教育部門に所属する教員の半数が兼任)におけるピアレビューに参加した教員については記載しない。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	データ処理	1	60	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・定期的にタイピングテストを取り入れ、学生がゲーム感覚でトレーニングを積むのもよい工夫だと思う。
・単なる操作技術の習得ではなく、図表の意味や使い方にも言及していたので、学習意欲を刺激するにはよいカリキュラムの組み立てだと思った。
・後方から学生の様子をうかがっていて、授業中にメモを取ろうとする学生が少ないのが気になった。演習として、授業時間内外に課題を解かせることで知識の定着は図れると思うが、主体性を養うにはどのようにすればいいのか考えさせられた。

５．成果と課題

「データ処理」の主な内容は、表計算ソフトの習得である。しかし、単なる操作方法の解説にとどまらず、学んでいる操作や表示しようとしている図表などの意義についても解説するように意識している。出されたコメントを見ると、このような解説は学習意欲を刺激するという良い評価がなされており、今後、コンピュータ操作の授業を担当する際の参考となる。しかし、メモを取る学生が少ないという評価もあった。確かに、情報処理教室での授業では、筆記用具を出してメモをする学生は少ないように思う。メモを取りながら学ぶことは重要なので、この指摘は今後の課題として活かしたい。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	語学教育部門

２．部局の実施方針、方法

基盤教育センター提供の必修の第一外国語は時間割上の配置に制約があり、複数の専任教員が同じ時間帯で授業を行っている現状があるため、特定の授業をピアレビュー対象に指定した場合、物理的に参加できない教員がいる。さらに、授業は原則として達成度別編成であり、使用教室も普通教室とコール教室のクラスが混在しているため、授業により、その方針や運営がある程度異なり得る。従って、時間割上の制約と、担当クラスにより教員の興味が多様であることを考慮し、各教員が年間に最低1回、任意の授業を参観することを義務付けている。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	英語 VI	1	20	11			
2	英語 Ⅷ（経済学部）	1	28	12			
3	英語 IV（外国語学部）	1	18	13			
4	英語 IV（経済学部）	1	27	14			
5	英語 IV（経済学部）	1	32	15			
6	英語 Ⅷ（経済学部）	1	32	16			
7	ビジネス 英語 II（地域創生学群）	1	4	17			
8	英語Ⅱ（文学部）	1	22	18			
9	英語Ⅱ(経済学部)	1	26	19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

リーディングやリスニングといった受信型のスキルを訓練する授業においては「受講生の興味を考慮したトピックを扱い、学生の反応もよかった」「（長文読解の教材に）時事的な話題を関連付けて、受講生の興味を育てる工夫がなされていた」など、肯定的な評価が多かった。また、スピーキングやライティングなど発信型のスキルを訓練する授業においても「学生のプレゼンテーションとその質疑応答を通じた英語の運用能力向上だけでなく、補助教材を用いて学生がトピックを深く理解できるような配慮がなされていた」「ペアワークを多用し、教員が机間巡視をして発話の手助けをするなど目配りが行き届いていた」「学生に身近な話題をとりあげて、英語の発話を促していた」など概ね肯定的な評価が挙ったが、一方で、「受講生と教師、受講生同士のやりとりがやや不足しており、debateなどを用いて意見交換を活発化させるのも一つのやり方ではないか」と指摘される授業もあった。

５．成果と課題

リーディングやリスニングのような受信型のスキルを訓練する授業は、時に一方的で単調になりがちである。が、学生が積極的に授業に加わる意欲を育てるために、学生の興味をひくような適切な教材選択をどの教員も心がけているのが窺われ、評価できる。また、スピーキングやライティングの授業は、学生自身が積極的に外国語で発信する努力が要求されるが、実際は能力あるいは意欲の欠如のため、受身になりがちである。そのため、学生の能力や状況に応じたきめ細かい指導が必要とされるが、ピアレビューの対象となった授業では個々の学生への指導が十分に行き届いているように見受けられる。しかし、学生への指導が熱心になるあまり、学生同士の発話のやりとりが不足してしまわぬよう、バランスのとれた授業運営が必要とされる。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	ひびきの分室

２．部局の実施方針、方法

ひびきの分室では、原則として各教員は１年間でピアレビューに少なくとも１回参加することになっている。ただし、授業時間が重なることが多いことから、実現できない場合もある。前・後学期の始まりに、FD委員が各教員に解答してもらったアンケートに基づいて、参観していい授業の日程表を作成し、配布する。基本的にピアレビューを行う教員は、参観される側に事前に連絡を取るようにしている。参観する教員は、ピアレビューの後、報告書を書いき、FD委員と参観された教員に送信する。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	プレゼンテーションI	1	122	11			
2	経済入門 II	6	50	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・授業の冒頭で前回までに提出された課題を返却し、内容についての解説をしただけでなく、評価基準についても言及されていたので、学生にとって良い振り返りの機会となっていた。
・中岡先生の授業は、毎年のように授業改善を行っています。授業の仕方に工夫が見られ、見学していてはっきりとその工夫の跡が感じ取れます。

５．成果と課題

ほとんどの教員はピアレビューを実施できた。役に立つアドバイスやコメントは沢山あったが、他分野の授業を評価するのは容易なものではないと改めて思った。しかも、授業は一回一回行うものではあるが、コースは１５回の授業からなるもので、一回の授業だけではなく、コース全体を総合的に考える必要があるのではないか。

平成30年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	大学院	学科等	マネジメント研究科

2．部局の実施方針、方法

・基本的にどの講義も教員がお互いに自由に聴講できるという了解のもとで運営している。ただしマナーとしては、事前に担当教員に連絡することを申し合わせている。
・今年度のピアレビューは、基本的にはFD委員3人が分担して、新任教員の担当講義・新規開講講義を対象に実施した。
・ピアレビューの結果は、FD委員会で報告し教育内容・方法の改善を図ることとしている。
・また、平成26年度からは、本ピアレビュー結果を授業アンケート結果とともに対象となった講義担当教員に送付することとしている。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	消費者行動	1	17	11			
2	医療経済	2	7	12			
3	経営倫理と企業法務	2	14	13			
4	産学連携と事業創造	1	12	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

・資料の充実（消費者行動、経営倫理と企業法務、医療経済）
・適切な具体例や教員の経験したエピソードの紹介（医療経済）
・適切な要所での問いかけや質問（経営倫理と企業法務）
・効果的な写真や動画の活用（消費者行動）
・受講者の理解度を把握した授業運営手法（産学連携と事業創造）
・話すスピードの調整（消費者行動）
・双方向な授業へのさらなる工夫（医療経済）
・さらなる具体例の導入やケースの活用の検討（経営倫理と企業法務）
・ディスカッション時間の調整（産学連携と事業創造）

5．成果と課題

・新任教員の方々の講義はいずれも充実した資料を作成して頂いたうえで、丁寧な講義をされていた。具体例やケースの有効な活用や双方向の講義への工夫を講じることで、さらに充実した講義となると思われる。ピアレビューのフィードバックに加えて、FD委員として個別にインフォメーションを行った。
・昨年度に引き続き、学生のバックグラウンドの多様化や知識・経験面のバラツキが、一層拡大しているように感じる。これらの変化に対応した講義・カリキュラムの在り方が課題になりつつある。今後も継続してFD委員内および研究科内で議論していきたい。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	社会システム研究科	学科等	

２．部局の実施方針、方法

社会システム研究科博士前期課程設立時から設置されたこの総合演習は、各研究科毎の縦割り的カリキュラムの基に修学していた大学院生に横断的・複合領域的な内容に目を向けさせることにより複眼的で包括的な発想を持たせること、大学院生のそれぞれの専攻の枠を超えた複合領域的な観点から種々の研究課題を討議することを目的としているが、平成28年度から総合概論として改編され、さらに昨年度から東アジア、文化言語、地域コミュニティ、現代経済の４専攻中３専攻からの１名ずつの教員によるオムニバス形式となった。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	社会システム総合概論	4	16	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

さまざまな領域の学生がさまざまな視点からアプローチすることによって、興味深い考察がなされていた。この授業を通じて学生同士の交流が図れ研究の基礎が学べ、あわせて国際感覚が養えるというこの科目の目的が達成されている。院生は専門を異にする人々から構成されているので、よく知らないテーマについて分析をするのは難しいと予想していたが、思いのほかよくまとめられていたと思う。とりわけ3週間という短い期間のなかで情報収集ができたことは評価すべき点であったが、グループ間で話し合って共通軸を用いて比較すべきではないかと思う。院生が少ない本学においてこのような場の設定は重要であるが、分野が異なれば研究の方法論も異なるはずなので、それに特化した学習を行う方が効果的なのではないか。

５．成果と課題

昨年度に続き3人の教員で各4回目で発表を行う方法になった。学生は3～4人1組で報告時間各30分、質問時間各15分であった。その結果、授業がアクティブ・ラーニング中心になり学生が研究内容を発表して論理的なまとめ方になったことと、留学生が高度な日本語能力を見せ日本人学生との意見交換ができて刺激的な授業になったという2つの成果が上がった。一方、日本人学生と留学生の学力差という問題が残った。

平成30年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	法学研究科	学科等	

２．部局の実施方針、方法

従来、法学研究科のピアレビューは実施してこなかったが、一昨年度に、初めて1科目実施した。平成29年度より、法学研究科でもピアレビューをきちんと実施することとしたが、ただ現実問題として、在籍している院生数が非常に少なく、加えて論文指導科目はピアレビューに適さないため、各学期で1科目のみ実施することとした。今年度も、1学期に法律系科目、2学期に政策系科目について実施した。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	憲法ＢⅠ	2	4	11			
2	途上国開発論Ⅱ	2	1	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

大学院の授業であるため、各科目には学術的方法論に違いがあるし、しかもどちらも受講生が1名であったため、共通する主な意見・コメントは抜き出しにくいが、いずれも受講生の関心に沿った内容の授業であった。どちらの授業も、受講している院生が、自分の特定課題研究論文に繋がる素養を身につけることができそうな内容であった。

５．成果と課題

年間で2科目だけとは言え、ピアレビューの実施により、各院生の問題関心にマッチした講義を教員側が心がけていることを確認することができ、この点が成果と言える。昨今の法学研究科は、留学生がおよそ3分の2を占めているため、留学生の満足度を高める講義のあり方を探ることが、継続的課題と言えるが、加えて、日本人学生の場合にも、満足度を高める授業が望ましい。今年度は日本人学生を対象とする場合の授業のあり方を確認できた点が大きかった。

第４章

アクティブラーニングの工夫
ー　５名の先生へのインタビュー　ー

アクティブラーニングの工夫――5 名の先生へのインタビュー――

はじめに

FD 活動広報ワーキング・グループでは、授業改善に関する何らかのヒントや示唆を提供すべく、毎年授業紹介を行っています。

今年度は「アクティブラーニングの工夫」を紹介いたします。これまでは、授業評価アンケートに基づいた「ベストプラクティス」かインタビュアーの先生方の独自の視点による「特色ある授業」のいずれかの紹介を主としてきましたが、本年度は昨今注目度が向上してきている「アクティブラーニング」に焦点を合わせることといたしました。

アクティブラーニングについては、それをそもそもどのように考えたらよいのか、そしてまたどのように取り組んでいくべきかをそれぞれの先生方が試行錯誤しておられる状態であろうと思います。簡単に正解の出る問題ではありませんが、本インタビューがこうした問題を考える一助ともなればと思います。

以下では、本ワーキンググループメンバーが 4 学部 1 センターの 5 名の下記に示す先生方のご協力のもとに、「アクティブラーニングの工夫」を紹介しています。この 5 名の先生方は、いずれもアクティブラーニングに関わる授業を担当されており、趣旨に賛同されてインタビューにご協力いただきました。

齊藤園子先生（外国語学部国際関係学科） 科目：英語表現法 B（講義・実習形式）
隈本覚先生（経済学部経営情報学科） 科目：入門演習（演習形式）
三宅博之先生（法学部政策科学科） 科目：政策実践プロジェクト（演習形式）
神原ゆうこ先生（基盤教育センター） 科目：教養基礎演習Ⅱ（演習形式）
赤川貴雄先生（国際環境工学部建築デザイン学科） 科目：設計製図Ⅱ（演習形式）

なお、三宅博之先生へのインタビューには、法学部の FD 委員である中井遼先生もインタビュアーとして参加されました。

インタビューは 12 月に実施し、授業の事前準備、実際の授業の進め方、アクティブラーニングについてどう考えるか、授業アンケートの活用法、学生のやる気をどう引き出すか、などについてお聞きしました。

なお、本章の作成にあたり、作成方針やインタビューの質問項目などにつきまして、本学 FDアドバイザーの中溝幸夫先生より有益なご助言を数多くいただきました。記して感謝申し上げます。

ワーキンググループメンバー：
山下　剛、西　香織、矢澤　久純、浅羽　修丈、河野　智謙

仕掛けづくりに工夫を凝らす齊藤園子先生（外国語学部国際関係学科）

【科目名】英語表現法 B
【配当年次】2 年次
【選択・必修の別】必修
【受講者数】20 名
【授業形式】講義・実習
【他学部他学科が受講可能かどうか】受講不可

アクティブラーニングの工夫（具体的な施策）:
事前の周到な準備により、学生のやる気と学ぶ力を引き出す「仕掛けづくり」をする

1. 授業の概要と事前準備、事後作業

当該授業は、文化、社会、科学技術、環境などに関わる様々な問題について、多角的、論理的に思考して自分の意見や批評を英語で表現する能力を養成することを目指す授業であり、ディベート活動が中心となっている。ディベートの各テーマを 2 回の授業に分け、1 回目はテーマに関わる基本的知識や英語表現を習得させる時間とし（小テストを含む）、2 回目は事前に提出されたライティング課題の確認やディベート活動（振り返り、評価を含む）を行うという形式で進めている。ディベートはチーム活動で、学生はチームで準備活動を行って本番に臨む。ディベーター（賛成側、反対側）、司会、タイムキーパー、記録係、審判など、全員がいずれかの役割を担う。

教員の事前準備・事後作業は大きく以下のようになっている。

1 回目	事前準備	教科書内容、小テスト、ミニディベート活動（ブレーンストーミング）の準備
	事後作業	小テストの採点、ミニディベート記録票の確認（2 回目に返却）
2 回目	事前準備	ライティング課題の提出状況の確認（Moodle 利用） ディベート用の配布物準備
	事後作業	ライティング課題の添削・評価、ディベートの相互評価票・自己評価票の集計（次回、返却）

2. 座学との関係性など、アクティブラーニングをどのように考えているか

1 テーマにつき 1 回目は座学をもとに話題に関わる基本的知識や英語表現を習得させ、2 回目のライティング課題やディベート活動に結びつけるという形で、座学とアクティブラーニングをバランスよく、また効率よく結びつけた授業スタイルを取っている。座学とアクティブラーニングは対立するものではなく、両者のバランスをとり、効率を求めることが重要である。

3. アクティブラーニングの具体的な施策と、その意図について（その施策によって学生にどのような能力をつけさせようと考えているか、など）

学生自身が単独でできることと、授業を通してでなければ学べないこと（身につけられないこと）を見きわめた上で、事前・事後学習からその成果を生かしたライティング課題の相互評価やディベート活動という学生間の協働活動までの「流れ」を作り、協働活動（ライティング課題に基づく活動やディベート活動）が有意義かつ質の高いアクティブラーニングになるような「仕掛けづくり」を心がけている。協働活動を通じて、多角的・論理的に各問題を考察する力が伸長されるとともに、英語による意見交換を通じて、英語の必要

語彙や表現方法の定着が促進されていると考えている。

4. どのように授業の質の向上をはかっているか、授業アンケートをどのように活用しているか

ディベートの後には時間の許す限りで、クラス内でフィードバックを口頭により共有する。授業後には自己評価票・他者評価票を提出させる。その欄にコメントを書く場所を設けているため、口頭で共有できなかった意見はそこに書いてもらう。少人数クラスのため、学生には意見がある場合は随時表明してもらい、学期内に授業改善、質の向上ができるように心がけている。授業アンケートは学期の終わりに行うため、その結果を次学期または次年度に生かすことはできても、学期内の授業運営に生かすことが難しい面がある。授業アンケートの結果は、学生の満足度を捉える一つの機会として参考にしている。

5. 学生の知的好奇心、やる気を引き出すための工夫

ディベート活動では最後に投票で勝敗を決める。また、最も印象に残った発表者を学生に選んでもらっている。勝敗よりも建設的な議論が交わされることが重要であることは事前に伝えているが、学生のモチベーションの向上には役立っているようである。また、特に難しい話題の場合には、教科書以外からも話題に関わる補助資料を配布するなどして、理解が深まるよう留意している。

6. 学生の学習評価をどのような方法で行っているか

ディベート活動については、相互評価票の集計結果を、学習評価をする際の参考にしている。他にも小テストやライティング課題、ミニディベート記録票を集めており、客観的な評価と主観的な評価を組み合わせた形で、各学生の到達度を図ることができるように努めている。期末試験も同様に客観問題と論述問題の両方を取り入れた形で作成している。

7. その他

この科目は語学力の育成という側面を大きく持つ科目である。語学教育の場合、学習効果に鑑みて習熟度別にクラス編成をすることが多い。しかし当学科ではプレイスメントテストを行っていないため、学生の英語習熟度には幅がある。学生も照準を合わせづらい面はあるように思われるが、それぞれに努力して取り組んでいるように見受けられる。ただ、この種の科目では、学生間の相互作用の占める割合が高くなるため、クラス編成面での工夫を検討する余地はあるように思っている。

8. インタビューを終えて

完璧すぎるほど周到に授業の「仕掛けづくり」がされていて、授業の事前準備・事後作業いずれも想像以上に時間を要するものと思われる。ただ、齊藤先生の用意された「舞台」にうまく上がれなかったり、1回でも欠席したりすると（または1回でも課題を提出しないことがあると）、授業の活動についていけなくなる学生やモチベーションが下がる学生が出てくるのでは、という懸念を抱いたが、齊藤先生にその点をうかがったところ、「グループ活動が多いこともあって、大体において学生は一生懸命に取り組んでいる」という回答であった。それだけ、授業の「仕掛けづくり」がしっかりなされており、学生の心をつかむ魅力的な授業が行われているということであろう。難易度の高いテーマについては、きちんと学生のために「はしご」を架けておくなど、細やかな配慮がなされている点はぜひ見習いたい。

（文責：西　香織）

問いかけ考えさせる隈本覚先生（経済学部経営情報学科）

【科目名】入門演習
【配当年次】1 年次
【選択・必修の別】必修
【受講者数】15～18 名
【他学部他学科が受講可能かどうか】他学部受講不可
【授業内容】グループ単位で協力してテーマを決め調査しまとめ、最終的にプレゼンテーション大会で発表をすることを目的とする。このプロセスを通じて、行動力・コミュニケーション能力・思考力・表現力などを養成する。

アクティブラーニングの工夫（具体的な施策）：答えを与えるのではなく「問いかける」

1. アクティブラーニングについてどのように考えているか

「アクティブラーニング」について特に意識したことはない。ただ、入門演習を進めるにあたって、プレゼン大会で各グループがよいプレゼンをするということ以外に、各人が「自分で考えるくせをつける」ことを目指して授業を運営しており、そのために「考えさせる」ことを意識している。

アクティブラーニングと言っても、本来的には基礎知識を身につけた上で行うべきものだと思う。例えば、専門的な知識を身につけようと思えば、前提として基礎知識がなければアクティブラーニングをしても効果は望みにくい。ただこの授業は、大学に入学してすぐの時期にあるので、そこまではできない。「自分で考えるくせをつける」というところまでがせいぜいであろう。

「考える」ということは、学問の根本であり、人間が生きていく上で重要。考えないと退化するしかない。学生にはよく「頭は使わないと衰えてしまうよ」とは言っている。

2. 実際の授業の進め方

全 15 回は、初回に自己紹介・前年の優秀プレゼンの鑑賞、第 2 回までにグループ決めをしてテーマを 2 つくらいに絞る、第 3 回までに各テーマで 4 つほどサブテーマを決めて最終的にテーマを一つに絞る。この段階までに、グループ内の仕事の役割分担も各グループでしておくように指示している。ただ、役割分担の仕方はこちらからは提示せず、各グループに任せている。それぞれの学生の強みがあるので、それが生きるように役割分担してくれればいいと考えている。なお、ここまでの回で剽窃についての指導も行っている。

第 4 回～第 10 回までは、第 13・14 回のプレゼン予選・本選の本番に向けて、グループの進捗状況を確認しながら各グループのペースでプレゼンまでまとめる。最初に目次をつくるようには言う。結論をまず言って、根拠を出してまた結論というようなものである。また途中で、「よいプレゼンとは」をテーマに各グループがプレゼンする回を設けている。

その後、第 11 回に予行演習、第 12 回までに修正してもう一度練習。第 15 回は反省会。

各回について、基本は各グループを回って、今週何かいいことがわかったか、進んだかを聞いていく。その上で、いろいろと問いかけるようにしている。

3. 授業の事前準備

これまで 10 何年か入門演習をしてきてその中で修正してきた。例えば、グループワークのため、ケンカになってしまうと作業が進まなくなる。過去、ケンカになってしまったことがあったため、その後は、仕事の役割分担をグループ内でさせるようにした。

各回の授業については、事前に進め方を決めてしまうよりも、その場の雰囲気を見て対応することが多い。例えば、グループ分けについても毎年決まった分け方ではなく、あみだくじにしたり、テーマを発表させて関心が合う人同士にしたり、仲良し同士にしたり、その年の状況・様子を見てその場で決めている。

4. アクティブラーニングの施策の工夫について

「考えさせる」ことを意識しているので、答えを与えるのではなく、つねに「問いかける」ようにしている。こうした方がいいのではないかではなく「どうしたいか」を問い、プレゼンで言いたいことに対して「論拠は何か」を問う。

「問いかけ」はグループごとにしているが、誰か一人に問いかけるのではなく、できるだけグループの一人ひとりに問いかけられるようにしている。例えば、前の回はこの人に問いかけたから、今回は別の人に聞くというようにしている。

論拠については、自分たちだけの勝手な思い込みで話すのではなく、聴衆となる学部一年生や教員がこの論拠を聞いて本当に納得するのかどうかを考えるように言っている。

また論拠を調べるについては、インターネットを使ってもいいが、信用できるかどうかを判断するように言っている。例えば、政府のつくった統計や大学教授の論文なら信用してもいいだろうが、どこの誰が言っているかわからないものは信用できないであろう。

当初に設定した結論は仮説であり、その後調べていく中で、結論が覆れば、それはそれで面白いのでよいと言っている。

あまり提案等はしないようにしている。提案するのは、かなり考えたけどそれでもまだ迷っているというときである。また「こういう資料がどうしても見つからない」という場合は、手伝ってあげるときはある。それも学生が言ってきた場合に対応し、学生の自発性を重視している。

5. 授業アンケートの活用法

この授業の授業アンケートは報告書方式で、あまり率直な意見が出てこないため、あまり活用できていない。

6. 学生のやる気をどう引き出すか

学生のやる気を引き出すのは本当に難しい。ただ、できるだけ褒めるようにはしている。また、学生を見極めてではあるが、大丈夫そうな学生には、ダメなときははっきりダメだよと言っている。その方が少なくとも反省するし、やる気を出すケースもある。

7. インタビューを終えて

入門演習は、入学直後の、まだ人間関係もでてきおらず専門知識ももたない学生を半年でプレゼン大会で報告できるようにしなければならないため、本当に難しいと個人的に感じている。印象に残っているのは、「なぜ考えさせるのですか」との問いに対して「学問の根本であり、人間が生きていく上で重要だからではないか」と答えられたことである。今回インタビューさせていただいて改めて、この授業は「いいプレゼン」だけでなく学生の人生全般を見据えて進めなければならないし、アクティブラーニングも最終的にはそこが目標になるのではないかと感じた。また隈本先生は、その場の様子を読み取って対応することを重視されていた。アクティブラーニングではこうした要素がより重要になるであろう。一朝一夕にはいかないと思われるが、私自身も身につけていかねばならない能力であると感じた。

（文責：山下　剛）

学生の実地体験を重視し、活動による問題解決を目指す三宅博之先生（法学部政策科学科）

【科目名】政策実践プロジェクト
【配当年次】２年生以上
【選択・必修の別】選択
【受講者数】２３人
【他学部他学科が受講可能かどうか】不可
【授業内容】三つのプロジェクトを立ち上げて、学生が主体的に活動を行う。

アクティブラーニングの工夫（具体的な施策）：

アクティブラーニングの基本は「失敗から学ぶ」である。失敗を本人が経験しないと学習できない。そのためには、とにかく、「現場」を重視する。

1. 実際の授業の進め方

三つのプロジェクトを立ち上げて、それにつき学生が主体的に活動を行なう。

今年の三つのプロジェクトは、①あいのしまプロジェクト、②食品ロス削減学生プロジェクト、③まるごと韓国プロジェクトである。

まず、三つの班を作る。班分けに際して、合宿を行なった年もあるが、今年は実施しなかった。あいのしまプロジェクトと食品ロス削減学生プロジェクトについては、三宅ゼミ生が中心となるものの、関心がある他学部・他学科・他ゼミの学生にも開放しており（単位は出せないが)、一つのグループを作って活動している。なお、プロジェクトの掛け持ちを認めるので、複数のプロジェクトに関わる学生もいる。

次に、４月～５月に、それぞれのプロジェクトで前年に行なったことを４年生または３年生に発表してもらう。ここでは、３年生がメインとなる。この発表作業は、学生たちにとっては、ゼミ論集の礎となる。特に５月は、それぞれのプロジェクトで、年次計画を作成していく。これも、３年生がメインとなる。

活動開始時期は、それぞれのプロジェクトによって異なる。

あいのしま（藍島）プロジェクトは、５月～６月の間に１年生を実際に連れて行く。藍島の魅力発信や、藍島島内の人々とのふれあいを通して、島内の問題の解決を目指す。　食品ロス（略して、食ロス）プロジェクトは、食品ロスの問題を広く知ってもらい、食ロスをなくすための諸活動を行なう。実際には、５月に活動を開始し、教材作りを行なう。

まるごと韓国プロジェクトでは、韓国のことであればどんなことをやってもよく、１２月には、実際に韓国に行く。

１年生はこの科目の正式履修はできないが、１年生ゼミの時間には、これらの三つのプロジェクト全部を一度は経験させるようにしている。

2. 授業の事前準備

どのプロジェクトについても、資料の準備が必要となる。そして、どのプロジェクトも、学外の他者との関わりが欠かせないため、いわゆる渉外関係についての手配を行う。しかし、それも、教員は、知らない人との引き合わせのために、最初に話をつけるだけであり、学生が一旦知り合いとなった後は、その人との連絡等はすべて学生にやらせる。学生が単純な日程調整すらできないようでは困るからである。

また、藍島や韓国に実際に行く場合に、どうしても旅行関係・会計関係についての事務処理が必要になるが、それも、教員がやってしまっては意味がないので、学生にやらせる。

3.　座学との関連性

学生に物事を考えさせるという点で、アクティブラーニングは有用だと考える。ＥＳＤそのものがアクティブラーニングであり、実際に行動を起こさなければＥＳＤにならない。

実際の活動の後に、報告書を作ることも重要である。座学があってその次に（学んだことについて）アクティブラーニングなのではなく、アクティブラーニングをやってから、座学にいくのである。そうすることで、現場から問題点を発見し、その解決方法を理論的に考えることができる。この報告書は、三宅ゼミ論集の形で政策科学科資料室（２－４１９）に置かれているので、関心がある方は、自由にご覧下さい。

しかし、アクティブラーニングだけになってしまうのは良くない。政策科学科の講義内容等、座学で学ぶ事項があってこそ、アクティブラーニングを実施できる。

4.　授業の意図

学生に、国際社会に適応できる人になってほしいからである。アクティブラーニングの基本は「失敗から学ぶ」であり、失敗を学生本人が経験しないと学習できない。例えば、途上国では、駅のチケットや飲み物等の自動販売機があるとは言っても、おつりがでないタイプのものが存在し、購入者がちょうどのお金を用意しておかないと購入できないこともある。普通の路線バスの料金箱にも、そのタイプがある。これを、実際に自動販売機や料金箱を前にして経験して初めて、そのことを身にしみて学習することができる。こうしたことの繰り返しから、当該社会の現実の問題点を認識できるようになるのである。これが、「現場」の重要性でもある。

5.　どのように質の向上をするか

各プロジェクトにおいて、前年のメンバーの報告書をベースにして、それの上をいく報告書を作らせることで、自然と質の向上となる。

6.　学生のやる気をどうひきだすか

遊びの要素が重要と考える。そして、学生の自主性。過干渉しないこと。学生を褒めるようにしている。コミュニケーションのとれない学生をどうするかは、今度の課題である。

7.　インタビューを終えて

三宅先生が、学生と共に実際に現地に行って、その地で問題点を見ることを行なっていることについて、なんとなく知っているという教員は多い。例えば、海外まで行かずとも、水俣まで出かけて水俣病の現実について考えさせたり、海外では、韓国、インドネシア、バングラデシュ、モンゴルといった国々にゼミ生を連れて行き、その地での調査やその地の学生との交流を行なったりしている。

しかし、こうした活動の背後には、とにかく「現場」重視の姿勢、そして学生本人に実際に失敗を経験させるという発想があるのであり、つきつめれば、現場から問題点を発見し、それを解決することこそが、環境問題等の地球的規模の問題解決につながるという強い信念がある。このことは教員の間でほとんど知られておらず、その一端を知ることができる本インタビューは、実に有益な機会であった。学生を実際に連れて行くといったこれだけの活動を行なうには、実に多くの苦労が伴うことであろう。それでも敢えてそうした活動を行なうのは、学生に国際社会で通用する人物になってほしいという強き思いがあるからである。三宅先生は、まさしく、「アクティブラーニングの名手」と言えよう。そして、その名手たる三宅先生が、座学の重要性も指摘されていたことは忘れてはならない。

（共同インタビュアー：中井遼、文責：矢澤久純）

図書館で引用文献の検索とレポートの書き方を指導する神原ゆうこ先生（基盤教育センター）

【科目名】教養基礎演習Ⅱ
【配当年次】1 年次
【選択・必修の別】選択
【受講者数】3～10 名程度
【他学部他学科が受講可能かどうか】他学部受講可
【授業内容】本演習では、「テーマを自分で設定して、調べ物をしてレポートを書く」という作業に迷いがある学生が、レポートの書き方を基礎から学ぶことを目的としている。最終的には、文献を読んで自分の考えをまとめるレポート（高校までの小論文でも調べ学習でも感想文でもなく）を書くことを目指す。

1. 実際の授業の進め方

授業は、大きく前半と後半に分けて実施している。前半は教科書（輪読のテキスト）を分担してプレゼンテーションする。ただし、担当箇所を理解するための準備が必要であるため、教科書が全員揃うまでの期間を活用する。まず、教科書の「はじめに」などを部分的に読ませて、分からない Key Term を調べさせ、学生の調べる力をまずは確認する。口頭で説明させた結果として、理解不足・調査不足と判断した場合は、学生と一緒に図書館に行って、Key Term の調べ方について指導する。

図書館では、まず、学生にパソコンを使って蔵書検索をさせる。教員は、検索した結果を画面上でチェックし、持ってくるべき本を指示する。学生全員が持ってきた本を並べて、中身を順番に確認し、どの本が一番わかりやすいかについて議論する。その上で、辞書で調べるべき Key Term もあれば、専門書で調べるべき Key Term もあり、Key Term の種類を見極めて、調べるべき文献の種類を指導している。

後半は、教科書を元にテーマを学生自身で考えさせ、そのテーマについてのレポートを作成することが目的である。レポート作成の条件は、2,000 字以上で、かつ、2～3 冊以上の引用文献を活用することである。レポート作成前に、どのようなレポートを作成するつもりか、レポート構想報告を順番に割り当て、報告資料には引用文献をつけるだけでなく、実物も持ってこさせ、適宜指導する。

第 13 回目までにレポートの草稿を 2 部提出させる。2 部の内、1 部は担当教員が受け取り、もう 1 部は、相互評価用として活用する。相互評価は、シャッフルで別の学生の草稿を受け取って、チェックするポイントが記載されたレポート相互コメントシートを記入し、授業の最後に自分宛てのコメントシートを受け取る。第 14 回目では、まず、教員が草稿に対する全体コメントを伝えた後、草稿のでき具合でグループを作り、各グループに個別コメントを伝え、草稿の修正をするよう指導する。レポートの最終締め切りは通常試験期間中に設定しているが､本人の希望によっては第 15 回の授業後でも受け取ることにしている。第 15 回目では、最終的にどのようなレポートに仕上がったのか、または仕上げるつもりかについて、学生からプレゼンテーションを受ける。学生は、学生同士および教員からのコメントを踏まえ、修正版のレポートを提出する。

2. アクティブラーニングの工夫（具体的な施策）

この授業では、レポートのテーマを決定するところから（教科書に即したものという制約はある)、調べる、レポートを作成するという活動に至るまで、全てが学習者主体の学習活動となっている。特に、レポート作成において重要なプロセスである引用文献の調査方法の指導には力を入れている。そのため、引用文献の使い方に関するアクティブラーニン

グにおいて、幾つかの工夫を行っている。

まず、レポートにおいて、引用文献となりうる文献はどのようなものかについて、実践を通じて学習させている。レポート作成において散見されるのが、テーマに関連していると思われる文献を読んだだけで、参考文献として取り上げることである。この授業では、関連文献を読んだだけではダメであると指導している。読んだ文献のどの文章が、テーマを読み解くのにどの程度寄与しているのかが明確になるような引用ができているかがポイントであることを指導している。このポイントを理解させるために、学生の理解状況に合わせて、個別指導も交えて指導している。学生が調べた文献を評価するときの工夫は、実物を持って来させ、引用した箇所を学生と一緒に確認することである。引用の仕方や引用表記ミスなどを、実物を前にして指導することができるので、学習効果が高い。

3. 授業の事前準備

事前に、図書館の蔵書について調査している。特に、Key Term を調べる授業の際は、事前に調べておくことが重要となる。また、ダメなレポートの事例や、レポートとは何かについては、授業準備として関連文献に目を通し、その年度の学生の特徴に応じて講義を追加している。

4. 学生の学習評価をどのような方法で行なっているか

評価は、レポートが 50%、授業貢献が 50%である。授業貢献とは、授業の中での発言数や、授業前半の輪読、そして、授業後半のレポート構想報告の出来具合で評価している。

5. アクティブラーニングについてどのように考えているか（座学との関係性）

座学がメインだと、学生は主体的に考えることをなかなかしてくれない。例えば、文献の選択においても、教員が選んだものであれば、それは与えられたものになってしまう。そうではなく、学生が自ら選ぶという経験が、主体的という意味でのアクティブラーニングとして価値があると考える。

その意味で、今回取り上げた授業とは異なるが、「異文化理解の基礎」や「現代社会と文化」、「政治の中の文化」で取り扱っている課題も、アクティブラーニングと捉える。その課題は、学内で上映されている映画（北方シネマ）を鑑賞して、レポートを書くという課題である。ポイントは、期間中の全ての映画に、それぞれの授業に即した毎回異なる課題を設定することであり、学生には期間内に上映している映画であれば、どの映画を鑑賞しても構わない旨を伝えている。教員自身も事前に映画を観ておかないといけないという点で、負担はあるが、ひとつの映画でも、授業で学んだことを生かして着眼点を変えれば別の見方ができることを知ってもらいたいという狙いがある。

6. インタビューを終えて

図書館を上手に活用しながら、大学での学びに必須であるレポートの書き方について、教員からの一方的な知識伝達ではなく、学生が主体的に学習活動している様子が伝わってきた。学生の個性や理解状況に合わせて個別に指導する場面もあり、学習の成立に高い関心を抱いているところに感心する。恐らく、学生は学習活動を通じて、多種多様な気付きを経験していることだろう。授業を前半と後半に分けて、前半ではレポートの書き方についてじっくり学び、後半ではそれを活用するという工夫も興味深い。レポートの書き方を目的とした授業だけではなく、色々な授業で応用できそうである。

（文責：浅羽　修丈）

全人的に努力を促す赤川貴雄先生（国際環境工学部建築デザイン学科）

【科目名】設計製図Ⅱ
【配当年次】2 年次
【選択・必修の別】必修
【受講者数】55 名
【他学部他学科が受講可能かどうか】他学部受講不可
【授業内容】課題として前半は集合住宅、後半は学校施設等に関する設計を行う。両課題を通じて、都市計画的、環境的配慮を行い、外構計画、設備計画、構造計画 、防災計画等に関する基礎知識を習得し応用できる力の養成をめざす。課題を通して表現・発表能力の育成も図る。本演習においては専門知識の習得、専門分野のスキル（製図能力）、プレゼンテーション能力の育成をめざす。

アクティブラーニングの工夫（具体的な施策）：

個人の能動的な努力が必要であることを自覚させることを意図して、全人的に努力を促す。

1. 今回のインタビューの経緯について

今回は、建築に関する専門性とリーダーシップを発揮して北方キャンパスの図書館におけるアクティブラーニング空間の整備と活用促進をはじめとした、本学における「アクティブラーニングのための環境整備」に関して先駆的な取り組みをしておられる赤川貴雄先生にお話を伺いました。

赤川先生の取り組みと考えは、ひびきのキャンパスにおける任意の教員を対象とした昨年度のＦＤ研修「テーマ特化型ＦＤ研修」における「アクティブラーニングのための環境整備」というテーマでの講演で、キャンパス教員間でも広く共有されています。赤川先生は、ご自身でも講義に積極的にアクティブラーニングの要素を取り入れておられるので、今回の「アクティブラーニングの工夫」というテーマでインタビューを行う対象として、ひびきのキャンパスにおいて最も適切な人物であると考えます。

以下、インタビュー内容です。

2. アクティブラーニングについてどう考えるか

知識の応用と個人の自主的な学習、建築に対する普段からの見学等の自助努力が重要なので、非常に厳しいが、座学で実力を発揮しない学生が成果を出したりするのはアクティブラーニングならではと考えます。

3. アクティブラーニングの施策の工夫について

この「設計製図Ⅱ」では、学期を通じて受講者全員に設計のための課題を二つ課すにあたり、まずは、現場見学を得て、その後、各講義の中で各学生が作成してきた設計案に対してエスキース（設計案の検討）を十分におこない、課題の最後で講評会を行います。また、この講義では、「完全な個別指導」を行うので、グループ作業などで成果をごまかしたりする余地はなく、純粋に個人の努力が最後の作品として実を結び、講評会でのそのプロセスと成果が発表で全てあらわになるという哲学で実施されています。

今年度は55名の学生の「個別指導」を行っていますが、主担当教員1名、兼担教員1名、非常勤講師1名とEA・TAの合計4つのグループに分け、そのグループを1週間で回転させて均質に指導できる体制をとっています。成績責任者である私以外にも科目を分担できる教

員がいることも個別指導を複数ラインで同時平行して実施できる要因になっています。国際環境工学部での実習・実験・演習は、技術職員（ＥＡ、エンジニアリング・アドバイザー）や学生・大学院生によるティーチング・アシスタント（ＴＡ）のサポートがあることが多く、本科目もそのような仕組みを活用してローテーションに工夫を凝らして、全学生への個別指導が実現しています。

発表の場である「講評会」は他の学生の成果を相互に見る機会なので、かなり盛り上がります。また、笑いや感嘆の声もあがるので、その場の盛り上がりを活用して、学生の参加感を醸成するのも教員の重要な役割です。

4.　実際の授業の進め方

通常の大きな講義室での板書やパワーポイントを使ったレクチャー形式の講義と異なり、完全に個人指導の形をとるため、学生一人ひとりの準備状況を把握することが可能であり、その上で、長年の経験により、準備ができている学生に対してはより難易度の高いレベルを目指させ、そうでもない学生には奮起を促すというスタンスで講義が運営されています。

5.　授業の事前準備

あらかじめ、各学生が授業に参加するのに先立ち、「課題の設定」を指示しています。

6.　学生のやる気をどう引き出すか・学生の学習評価をどのような方法で行っているのか

個々の学生の作品に対して的確なコメントを行うことにより、学生の信頼を得るように努めています。その際に、学生の成果達成に対して教員としていかに気にかけているかを明示的に表現することも重要だと考えます。

7.　授業アンケートの活用法

アンケートでは、なかなか本音は出てこないので、個別指導、講評会での反応を見ています。

8.　講義の質の向上を図るためには、どのような事が必要か

教員として必要なのは忍耐と努力のみではないでしょうか。具体的には、図面の書き方の習熟度の低い学生に対しては忍耐強く図面指導をおこない、一方で習熟度の高い学生に対しては高度な設計手法を紹介します。

9.　インタビューを終えて

「個々の学生に的確なコメントを行い学生からの信頼を得る、学生の成果達成に対していかに気にかけているかを明示的に表現する」というご回答からは講義の臨場感が伝わってきました。

また、授業アンケートについてのご回答は、一般化はできないかもしれませんが、講義のスタイルによっては、学生の考えやレスポンスが授業アンケートよりも明確になりやすいこともあるのだと理解しました。

最後に、赤川先生の「教員に必要なのは努力と忍耐のみである」というコメントを通じて、赤川先生は、アクティブラーニングの場では、教員は学生に一方的に働きかけるだけではなく、学生側の気付きやアクションを待つことの重要性を指摘しておられるのだと理解しました。アクティブラーニングを取り入れる上で教員間で共有すべき考えだと感じました。

（文責：河野　智謙）

第５章

FD 委員会について

(1)活動概要

“北九大スタイル”のFD活動とは、ボトムアップ型とトップダウン型の活動の併用である。ボトムアップ型では、FD委員会内部にワーキング・グループ（以下、WG）を設けて、“各学科選出のFD委員のアイデア”に基づいたFD活動を展開している。従って、WGの活動には学科の考え、アイデアが反映される。今年度３つのWGは、昨年と同様、①研修WG,　②FD活動広報WG、③授業評価WGであった。

一方、トップダウン型のFD活動は、年２回（春季、夏季）の『新任教員研修』である。この研修は、FD委員長、副委員長、FDアドバイザー、担当事務によって主導され、毎年、全学で10～15名の新任教員および数名の既在籍教員が参加している。新任教員は、本学のFD活動についての基本的知識を学んだり、模擬授業を受講したりした後で、アクティブラーニング形式（小グループ・ディスカッション）で、授業についての工夫やスキルを学んでいくことを主眼にしている。新任教員は、未来の北九大の教育活動を担う人材なので、その研修は極めて重要である。

各WGの今年度の活動を振り返ってみよう。研修WGでは、昨年度のFD委員会において各学科・部局に研修希望調査を行った結果、提案された全学研修および部局内での研修を実施することになっている。今年度は、北方キャンパスで６回、ひびきのキャンパスで１回のFD研修会が実施された。

北方で行われた全学研修は、①『Moodle活用事例とアクティブ・ラーニング』（基盤教育センター、地域創生学群、情報総合センター主催　10月３日開催）、②『大学教育再生加速プログラム事業FD研修「主体的学修を促す授業設計」』(大学教育再生加速プログラム運営委員会およびAP事業推進室主催　９月21日開催）、またひびきのキャンパスで行われた全学研修は、①『理系の先進的なアクティブ・ラーニングの取り組み事例とその評価法』(国際環境工学部主催　10月31日開催)。以上の他に、経済学部、法学部、マネジメント研究科のそれぞれで部局内の研修が行われた。

FD活動広報WGでは、授業紹介のテーマとして「アクティブラーニングの工夫」をとりあげ、５つの授業を紹介した。５つの授業科目とその担当者が選定され、各科目担当者にWGメンバーがインタビューし、その結果が文章化されて、FD委員会報告書に掲載された（本報告書の第４章「アクティブラーニングの工夫」を参照）。また、できるだけ多くの教員が本報告書を閲覧することを期待して『FD活動報告書』（資料室版）の構成や資料室ファイルの表紙を工夫した（本書の「あとがき」参照）。

授業評価WGでは、特に記録すべき活動は行わなかったが、授業アンケートの回収方法についてハラスメントのリスクを含んでいる可能性があるということで、このことについて継続的に議論することになった。

『新任教員研修』については、例年通り委員長、副委員長、FDアドバイザー、学務FD担当者による新任教員春季研修が実施され、６名の新任教員、11名の既在籍教員が参加した。FD研修後に行ったアンケート結果によると、新任教員研修の参加者からは、おおむね好評であったという意見が寄せられた。とりわけ「授業をめぐるFD委員とのディスカッション」「北九大でのFD活動への取り組み」「学生との交流方法」などが好評だった。

一方、夏季新任研修（テーマは、「１学期授業の振り返り」）は、８月30日に実施され、新任教員６名、既在籍教員９名が参加した。こちらも研修後のアンケートによると、８割の参加者からは、「よか

った。」という応答が得られた。授業の振り返りの改良点としては、“10 分間程度の模擬授業形式”（実際の授業実践の紹介）を取り入れてはどうかという意見があった。

また、各部局単位で、それぞれ独自の方法によって授業のピアレビューが行われ、学期ごとに FD 委員会に報告書が提出された。その他、学外で行われた FD 研修（Q-Conference 2018）に本学教員が出席し、その研修内容が FD 委員会において報告され、質疑応答が行われた。

(2)活動一覧

＜FD 委員会＞

日程	回	内容
4 月 25 日	第 1 回	【議題】 1.　委員構成について 【報告】 1.　平成 29 年度実施 FD 研修報告 2.　平成 30 年度春季新任教員研修実施報告 3.　平成 30 年度 FD 活動の推進予算配当結果について 4.　大学教育学会第 40 回大会について 【その他】 1.　平成 30 年度 FD 委員会開催予定
8 月 8 日	第 2 回	【議題】 1.　平成 31 年度 FD 活動の推進予算について 2.　夏季新任教員研修の実施について 3.　FD 研修の実施について 【報告】 1.　各 WG の進捗状況について ・研修 WG ・授業評価 WG ・FD 活動広報 WG 【その他】 1.　FD 図書購入希望について 2.　1 学期ピアレビュー実施報告の作成について
11 月 14 日	第 3 回	【議題】 1.　各 WG の進捗状況について ・FD 活動広報 WG ・研修 WG ・授業評価 WG 【報告】 1.　平成 30 年度夏季新任教員研修実施報告 2.　1 学期ピアレビュー実施報告 3.　FD 図書の購入について 4.　FD 研修の出席状況について
2 月 13 日	第 4 回	【議題】 1.　各 WG の進捗状況について ・FD 活動広報 WG ・研修 WG ・授業評価 WG 2.　平成 31 年度春季新任教員研修について 【報告】 1.　平成 31 年度 FD アドバイザーについて 2.　「Q-Conference 2018」参加報告 【その他】 1.　2 学期ピアレビュー実施報告の提出について 2.　年間ピアレビュー報告書の提出について 3.　平成 30 年度 FD 活動報告書の提出について 4.　平成 31 年度 FD 活動計画書の提出について

3 月 20 日	第 5 回	【議題】 1.　各 WG の活動状況について 2.　平成 30 年度 FD 活動報告について 3.　平成 31 年度 FD 活動計画について 【報告】 1.　2 学期ピアレビュー実施報告について

＜研修・講演会等＞

日程	項目	講師等
4 月 2 日 4 月 3 日 4 月 4 日	春季新任教員研修 （制度研修、FD 研修）	3 ページ参照
8 月 30 日	夏季新任教員研修	中溝　幸夫 （FD アドバイザー）
10 月 3 日	全学 FD 研修 Moodle 活用実践事例とアクティブ・ラーニング	22 ページ参照

(3)委員構成

平成30年度のFD委員会は委員長1名、副委員長1名、委員16名、アドバイザー1名で構成される。

役割	氏名	所属	職名
委　員　長	柳井　雅人	経済学部経済学科	教 授
副 委 員 長	田村　大樹	経済学部経済学科	教 授
委　　員	Rodger S. Williamson	外国語学部英米学科・社会システム研究科	教 授
委　　員	西　香織	外国語学部中国学科	准教授
委　　員	尹　明憲	外国語学部国際関係学科	教 授
委　　員	畔津　憲司	経済学部経済学科	准教授
委　　員	山下　剛	経済学部経営情報学科	准教授
委　　員	五月女　晴恵	文学部比較文化学科	准教授
委　　員	田中　信利	文学部人間関係学科	教 授
委　　員	矢澤　久純	法学部法律学科	教 授
委　　員	中井　遼	法学部政策科学科・法学研究科	准教授
委　　員	廣川　祐司	地域創生学群	准教授
委　　員	村上　洋	国際環境工学部機械システム工学科	准教授
委　　員	河野　智謙	国際環境工学部環境生命工学科	教 授
委　　員	浅羽　修丈	基盤教育センター	教 授
委　　員	David Adam Stott	基盤教育センター	准教授
委　　員	Roger J.A. Prior	基盤教育センター（ひびきの分室）	准教授
委　　員	城戸　宏史	マネジメント研究科	教 授
アドバイザー	中溝　幸夫	FDアドバイザー	教 授

第６章

おわりに

この一年のFD活動を振り返って　―　私の振り返り

中溝幸夫（FDアドバイザー）

■今年度初めての試み　―　『FD活動報告書』(資料室版）の表紙を工夫してみようというFD活動広報WG（WGリーダー：山下 剛、経済学部）のアイデアがあった。これまで報告書の表紙は『平成〇〇年度　北九州市立大学FD委員会活動報告書』となっていた。このタイトルでは、一般の教職員にこの報告書を読んでみようというモチベーションがおそらく湧かないだろう…できるだけ多くの教員に読んでもらうためには、どうしたらよいか、それが表紙のタイトルを変えてみようというアイデアのきっかけであった。

その結果、タイトルを『FD活動の報告と授業設計のアイデア』に替えて授業設計のアイデアを強調し、その下に授業インタビュー記事の中からキャッチコピーになるようなフレーズを並べるというやり方を採用した。本年度の授業インタビューのテーマが＜アクティブラーニング＞だったので、初めにテーマを記述し、以下に示すような疑問文を並べることになった。

◇アクティブラーニングで学生の学ぶ力を引き出す工夫とは？
・どうすれば諸問題を多角的・論理的に思考して英語で意見を表現できるようになるか？
・どうすれば「自分で考えるくせ」をつけられるようになるか？
・どうすれば現場体験から学びを得られるようになるか？
・どうすれば文献の引用方法を身につけられるようになるか？
・どうすれば個人の能動的な努力の必要性を自覚するようになるか？
☞　本書を読めばそのヒントが見つかります！

小さな工夫ではあるが、このような地道な試みによってFD報告書を読んでみようというモチベーションが少しでも高まることを期待している。

■北九大スタイルのFD活動の他大学への紹介　―　平成30年12月19日　九州大学伊都キャンパス文学部FD委員会からFD講演を依頼された。依頼されたテーマは、『大学における最近のFD活動は・・・？』であった。私は、『北九大のFD活動と私の授業設計』というタイトルで、本学のFD活動を次の４つの特徴にまとめて話してみた。①大学トップから行う授業のピアレビュー、②ボトムアップのFD研修会、③新任教員のFD研修、④ベストプラクティスとしての授業担当者へのFD委員のインタビューとその紹介。①については、歴代の学長自ら授業を行い、その授業をピアレビューしてきたこと　―FD活動は大学トップの“やる気”が重要であること。②については、大学トップからの“お仕着せ”の研修ではなく、学科レベルで自由に提案された研修内容に基づいて全学的な研修を行っていること。③については、大学の未来を担う人材に、本学のFD活動のポイントを理解してもらうことが重要であること。④授業アンケートの結果、上位にランクされた授業や同僚から“効果的な授業”として選ばれた授業の担当教員に実際に同僚がインタビューして、授業設計のポイントを聴き出して、それを文章化して全学に伝達していることを紹介した。

フロアーに集まった九大の先生方の関心が高かった項目は、「授業のピアレビュー」であった。授業のピアレビューは、確かに本学のFD活動を表すトピックの一つである。本学でも、今後、授業のピアレビューをも

っと効果的に行う制度上の“仕掛け”が必要だと感じている。九大の講演では、フロアから『Moodle を利用する方法はないだろうか？』という質問も出たが、一考の余地があると思う。

ピアレビューで重要なことは、同僚の講義を“ただ漫然と聴く”のではなく、“もし自分がこの授業を担当するとしたらどう授業設計するか？”とか“もし自分が学生の立場だったら、どんな授業を展開するか？”といったアクティブな（自発的な）態度・モチベーションで受講し、実際にそれを実践してみることだ。

■アクティブラーニングについて　―　上で述べたように本年度の授業インタビューのテーマは、『アクティブラーニングを取り入れた授業』であった。アクティブラーニングの定義にはいろいろなものがあるが、それらに共通する基本的考えとは「学生相互の対話や“教え合い”を重視した主体的な学習」である。近年の学校教育（小学校から大学まで）でとりわけ注目されている学習のし方である。

アクティブラーニングについては「どのようにしてアクティブラーニングを授業に取り入れるか」という授業方法に注目が集まっているが、アクティブラーニングの狙いの一つは「どのようにしてアクティブラーナー（自発的学習者）を育てるか」である。それがアクティブラーニングによって達成されているかどうかを評価することはそれほど容易ではない（名古屋隆彦『質問する、問い返す―　主体的に学ぶということ』2018)。

アクティブラーナーが育っていることをどのようにして評価（学習効果のアセスメント）したらよいだろうか？　十分な方法とは言えないが、一つの簡便なやり方としては、授業の最後にアンケートをとるという方法がある。私は、15 回目の授業の終わった後で以下のような『授業の振り返りアンケート』をとっている。

(1) 授業全体を振り返って「授業目標」がどれくらい達成できたか（目標の主観的達成度）を評定してください。　＜⇒　授業目標６項目のそれぞれについて、主観的達成度を％で表現する。＞

(2) 「認知心理学」（私が担当している授業科目）の授業を受けて、あなた自身が“どう感じているか”次の項目について５段階評定する。

① 総合的にみて、この授業に満足している。

② 自分自身「脳と心」についての理解が深まったと思う。

③ 授業を受けて、認知心理学の知識をもっと学びたいと思った。

④ 授業で取り扱った問題について“さらに自分でも調べてみたい”と思った。

⑤ 自分や家族・友人の心や意識について考える機会が増えた。

⑥ 総合的にみて、授業内容は面白く、興味深かった。

(3) この授業の中で、あなたの学習意欲（学習への動機づけ）や興味・関心を促すような点（教師の授業工夫や言動）があったら、それはどんなことか書いてください。＜自由記述＞

(4) 認知心理学の成績評価法（中間試験 30%、期末試験 30%、連絡ポート成績 20%、授業課題の提出回数 20%）についてあなた自身どう思うか、どう感じているか、率直に書いてください。＜自由記述＞

このようなアンケートの結果を分析することによって、アクティブラーニングの学習効果の一端をある程度、推測することができると考えている。

以上が今年度、FD アドバイザーとしての私の FD 関連トピックの“振り返り”である。何らかの意味で、先生方のご参考になれば幸甚である。

平成30年度　北九州市立大学FD活動報告書
2019年3月発行

編集・発行　北九州市立大学 FD委員会
〒802-8577
福岡県北九州市小倉南区北方四丁目2番1号